漢語字音資料としての日本訓点資料

広島大学大学院教育学研究科教授　沼本克明

〔要旨〕

日本に於ける漢語(中国語)の受容の痕跡は訓読と音読という両様の形で残存する。本発表における「日本訓点資料」(以下、訓点資料)はその両者を包摂して取扱うこととする。

奈良時代以前の訓点については不明の点が多く今後の課題とし、平安初期以降の現存訓点資料を整理してみると、それらと日本漢字音ー呉音・漢音・新漢音・唐音ーと漢語字音との関係及び若干の具体的な資料を示すと、概ね次のようになろう。

平安時代

仏書訓点資料

◎訓読資料ー呉音系字音ー中国六朝期字音：成実論、最勝王経、十輪経、等

ー漢音系字音ー唐代字音：慈恩伝、西域記、高僧伝、等

◎音読資料ー呉音系字音ー中国六朝期字音：央掘摩羅経、大般若経、法華経、等

ー漢音系字音ー唐代字音：孔雀経、理趣経、

ー新漢音系字音ー唐末字音：八名普蜜経、密教声明資料、等

漢籍訓点資料

◎訓読資料ー漢音系字音ー唐代字音：尚書、毛詩、漢書、春秋左伝、史記等

◎音読資料ー漢音系字音ー唐代字音：蒙求

鎌倉時代～江戸時代

仏書漢籍訓読・音読資料ー唐音系字音ー宋末～明代字音：禅宗関係の諸籍、その他雑多

これら、日本側の訓点資料によって、漢語字音史にどのような知見を付け加えることが出来るかについて、具体的な資料を提示しながら紹介してみたいと考える。また、漢訳仏典については、その原語である梵語との絡みも問題となるので、その点にも若干の考察を加えてみたい。

Ⅰ呉音系字音資料の分析ー呉音と中国六朝期漢語字音

1平安初期仏書訓点資料の字音

平安初期の訓点資料として今日までに確認されているのは約１００点程であるが、いずれも南都古宗関係で、そこに出現する字音は訓読文中に含まれる字音語として出現するが、基本的に所謂呉音系字音である。若干の資料を例としてその特徴的な点を指摘する。

◎中国語の三内鼻音韻尾を区別する。

◎中国語の三内入声韻尾を区別する。

◎拗音は未定着である(表記が揺れている。音韻としての受け入れの試行錯誤が行われた時期と言えよう)。開拗音の表記は次のようである。

ァ行表記：逆(キアク)・敵(チアク)・遮(シア)・壌(ニアウ)(最大寺本最勝王経)、釈(シアク)・弱(美愿)(阿毘達磨雑集論)、馮(ヒオ)(菩薩善戒経)、楮(チオ)(金剛波若経集験記)、等

ヤ行表記：若(ニヤ)・渚(シヨ)(願経四分律)、諾(ニヤク)(弥勒上生経讃)

直音表記：術(スチ)・宿(スク)・遮(サ)・靂(ラク)・略(ラク)・昌(サウ)(最勝王経)、洲(ス)(地蔵十輪経)

類音字表記：嶺(令)(沙門勝道碑)、浄(上)・浄(赤ウ)・靂(百)(最勝王経)、渚(所)・情(性)・洲(守)(雑集論)、嵩(崇)・諒(京)(集験記)、乗(所)・渚(徴)・塚(令)・梁(着)・謫(生)(十輪経)、壌(法華経讃述)、弱(若)(法華経)等

呉音系字音の特徴は梗摂拗音韻に端的に出現し、通例では拗音「ーヤウ」であるが、次のような「ーイ」となった漢音形のものが出現している。

屏(ヘイ)・冥(メイ)・丁(テイ)(最勝王経)、刑(ケイ)(十輪経)、訳(エキ)(玄奘法師表啓)、席(セキ)・激(ケキ)(四分律行事鈔)

平安初期の仏典訓読には新しい漢音が混じっていることになる。奈良時代以後朝廷の漢音奨励の

影響として出現したものかもしれない。

◎合拗音には仮名書された例が皆無である。

輝(最勝王経)、轟(集験記)、灰(表啓)、郭(十輪経)、絹(四分律)、羂(霊異記訓釈)、葷(一字頂輪王儀軌音義)、券(中観論)、耎(雑集論)、耎(央掘魔羅経)、衰(雑集論)

合拗音は喉音字(カ行子音)に限られる。歯・舌・唇音字は直音で定着し、「ヌアニ」は唯一の例外で、早期の試行錯誤例と見るべきかもしれない。

以上、若干の具体例を示しつつ平安初期訓点資料の字音の実態を紹介したが、要するに呉音系字音で読まれているのである。なお注意しておく必要があるのは、これら平安初期の訓点資料には四声点が一切使用されていないという点である。呉音は四声認識なしに流通していたということになろう。

2 直読資料の字音

○央掘摩羅経一既知資料としては現存唯一の字音直読資料で、早く春日政治(1956)の解説が公表され、後に築島裕(1985)の再調査部分修正が公表され、それに基づいた沼本克明(1986)の簡略分韻表がある。全体量は多くはないが、早い時期の仏典読誦音の実態把握に重要な資料で、呉音系字音が使用されている。

安田八幡宮蔵本大般若経

○大般若経一慈光寺蔵本平安後期点〈1050年頃〉を最古として、多数の字音直読資料が現存している。慈光寺本の分韻表が松尾拾(1949)、高知安田八幡宮蔵本鎌倉初期点大般若経の仮名抜書が東辻保和(1970)、同分韻表が金正彬(2003)に公表されている。呉音系字音が使用されている。現存大般若経の字音の源流や系統ははっきりしないが、安田八幡宮本は南都興福寺辺からの請来経で、興福寺の真興〈934 ～ 1004〉と関係がある記事があり、また、大東急記念文庫本にも真興との関係が認められ、多分これら大般若経の字音の源流は南都古宗に帰するものであろう。

○法華経一西教寺蔵本平安後期点〈1050 ～ 1100年頃〉を最古として、多数の字音直読資料が現存 している。法華経字音直読資料の分韻表は未だ作成されていないが、次述の法華経音義の索引・分韻表が公表されている。呉音系字音が使用されている。法華経字音点の加点系統も実はあまりはっきりしない。字音点の通例として一切奥書が書かれていないからである。但し平安末期の古本が所蔵されているのは天台宗の寺院であって、恐らく、天台宗の伝承音であろう。

これら法華経字音点の中で、西教寺本は特に注目すべき資料である。

この体系整理の背後に明覚〈1056 ～ 1122?〉が見え隠れする。

○華厳経一高山寺蔵本等若干の字音点がある。但し、平安時代の加点本が見られない。調査の及んだ現存本の殆どが高山寺明恵華厳宗関係者の加点本である。その源流は南都興福寺等の古宗の音読にあるようであって、大般若経と同じ系統の字音と考えられそうである。

○その他一成唯識論諸本、中論偈頌諸本、金剛般若経諸本、六字神呪王経諸本、阿弥陀経諸本、無量寿経諸本、大雲輪請雨経諸本、が呉音加点資料である。詳細は省略する。

以上、字音点について紹介した。いずれも呉音系字音によって加点されている。その源流は奈良平安初期に南都古宗に於いて行われていた字音が伝承されたものであって、平安初期訓点資料に用いられていた字音と基本は重なるものである。但し、大きな違いは平安後期以後になってこれら字音点に四声点が使用されるようになるという点で、その意味については後で触れる。

3 辞書資料の字音

○和名類聚抄一源順〈911 ～ 983〉撰の漢和字典で当時の正音(漢音)と日常漢語音の資料となる。

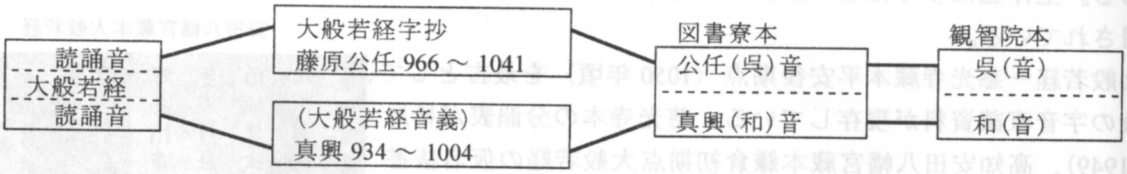
漢音資料として分析したものに柏谷嘉弘(1967～68)が有る。

○大般若経音義ー石山寺蔵本大般若経字抄を始め、無窮会本系大般若音義等が現存している(築島(1960))。石山寺本大般若経字抄と無窮会本系音義6本については、沼本(1978)、築島(1983)に索引が公表されている。これらの音義は、大般若経の読誦に使用されてきた字音を整理体系化しようとしたものとして位置づけられ、その字音注は呉音系字音を反映したものである。

○法華経音義ー九条本法華経音、保延本法華経単字等多数の音義が現存している(築島(1966))。これらの音義は、法華経の読誦に使用されてきた字音を整理体系化しようとしたもので、大般若経音義とともに、同じく呉音系字音を反映している。法華経単字の仮名索引が吉田金彦(1957)として公表されている。法華経音義の集成分韻表が小倉肇(1995)として公表されている。

○類聚名義抄の「和音」と「呉音」ー類聚名義抄には原撰本系の「図書寮本」と広益本系の観智院本や高山寺本がある。そこに「和音」「呉音」として示されている字音は、そのように明示して示されているために呉音系字音の議論に種々の話題ー和音・呉音は同じ物か否か、違うとするとどう違うか等ーを提供してきた。

この点につき、沼本(1982)はこれらの字音は次のような関係でとらえられるものであることを論じた。



即ち、源流はともに平安中期の大般若経読誦音を基盤としていたものであって、両者に現れる若干の相違は、公任(の流派)と真興(の流派)の読誦音の相違であったと見られる。

なお、この和音・呉音の分韻表は沼本(1995)として公表されている。

4 直読資料と辞書音義資料の呉音系字音

○直読資料の不純性

上に紹介した呉音資料としての直読資料を観察すると、西教寺本や来迎寺本法華経字音点には

懐妊(クワイニン)　容顔(ヨウガン)　楼閣(ロウ)　野牛(ヤギウ)　怨敵(テキ)　月(グエツ)　付弟(フテイ)　分明(フン)

の様な漢音形が出現している。大般若経についても、安田八幡宮蔵本の例を示すと

叔穆(シクボク)　漁猟(ギヨ)　鼓散(コ)　虎豹(コ)　涕泣(テイ)　灰燼(クワイ)　慇懃(インギン)　雪嶺(レイ)

の様に漢音形が出現している。

要するに、これらの直読資料においては、呉音を主体としつつも漢音を交えた読誦が行われていた事になる。そう言う意味からは、直読資料の字音の体系は不純性を持っていたとしなければならない。このような不純性の原因については種々の可能性が考えられようが、明らかなのは、語彙音としての混入であって、平安時代に於ける漢音の優位性が背景になっていることは否定できない。ともかく、「法華経・大般若経の読誦には呉音が使用されている」という捉え方は出来ないのであって、それらは、あくまで「法華経読誦音」「大般若経読誦音」として見なければならない。

○辞書音義資料での処理

本邦側で撰述された法華経及び大般若経音義は概ね単字掲出の形である。これらの音義では呉音漢音を区別しているのであろうか。法華経の場合について「九条本法華経音」を例にとって若干を示してみる。

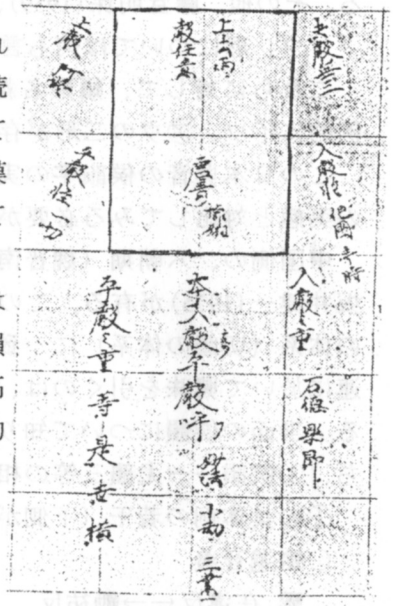
虎　去有反(ク)　去於反(コ)　　分　不云反(フン)　復雲反(ブン)　　衣　於稀反(エ)　於記反(イ)　　魁　過皆反(クワイ)　果廻反(エ)　　関　過円反(クエン)　過讃反(クワン)

これら一字に反切を持つものの一方は呉音、一方は漢音形である。これは、実は前項で示した法華経読誦音に漢音を交えている実態と完全に重なるものであって、直読資料で語彙音形として混入

した漢音とそれ以外の主体となる呉音の両方を在りの侭に掬い取って反切音化して音義に固定したものであることが知られる。同様のことは大般若経音義についても言いうる。このことは、音義という学的処理を加えたものであっても呉音から漢音を取り去り、読誦音を呉音で統一するというような処理は行われていなかったことを物語っている。

但し、法華経読誦音の場合についてみると興味有る事実が指摘できる。

先に引用した九条本の巻末に下のような声点図が掲げられている。この声点図は、平声重、平声軽、上声、去声、入声軽、入声重の六箇所の声点と、本入声ナル(ヲ)平声(ニ)呼ブ、上去任意、唐音の三カ所、合計八カ所の声点を示したものとしてよく知られている。この中の「唐音」には「懐妊」の例が示されている。是については先に紹介したように、法華経字音点では漢音の「クワイニン」が加点されている。つまり、この九条本の撰者は、法華経読誦音に(呉音を主体としつつも)漢音が混じっていることを理解し、それを取り立てるためにわざわざこの声点を工夫したという事になる。



この九条本の方式は実際に西教寺本法華経字音点で詳細に実践されていることが判明している。要するに平安時代に於ける法華経の直読はその当時の伝統的な読誦音をそのままの形で尊重し、呉音によって読み方を統一していくというような操作は行われなかった、但し、漢音という体系を異にする字音が混入しているという事実は把握されていたと言うことになる。

一方の大般若経音義においては、漢音を指定する様な声点加点法は一切取られていない。詳細は省略するが、これは、いわば法華経音韻学と大般若教音韻学の程度の違いであって、法華経音韻学が非常に高度な域に達していたことの証拠となる事実である。このような学問的処理を加えた学者として、既明覚が比定出来る。

5 呉音系字音の特徴

a 中古音との対照ー呉音の中心層の母胎音の推定ー

所謂呉音は切韻系韻書の体系と規則的な対応をしない。詰まりずれている部分が大きいのである。そのずれの要因は何処にあるのか。

呉音が切韻の体系とどれだけずれているかについては「類聚名義抄」の「和音」の分韻表(沼本(1995))に拠って一応確認出来る。

ここではそのずれの一部を拡大して見ることによって、ずれの要因を考えてみる。具体的には、切韻の中の任意の一韻ー此処では「侯韻」ーを取り上げた。

切韻での侯韻の音価-əu を前提にすると日本側での仮名書き音形は「㋔ウ」となるはずであるが、「和音」での侯韻字仮名書音形としては次の如き整理が出来る。(声調は措く。( ) 内は不確実なもの。)

◎㋒形＝館(ブ)・部(ブ)・某(ム)・貿(ム)・茂(ム)・懋(ム)・頭(ヅ)・投(ヅ)・豆(ヅ)・荳(ヅ)・逗(ヅ(トウ))・拘(ク)・苟(ク)・垢(ク)・口(ク)・叩(ク)・藕(グ)・(歐(ウ))・(嘔(ウ))・吼(ク)・(樓(ル・ロ))・僂(ル)・陋(ル)

◎㋔形＝母(モ)・拇(モ)・斗(ト)・篌(コ(ゴ))・喉(コ)・猴(ゴ)・後(ゴ)・后(コ(ゴ))・髏(ロ)・瘻(ロ)・漏(ロ)

◎㋔ウ形＝剖(ホウ)・闘(トウ)・逗(トウ(ヅ))・溝(コウ)・鉤(コウ)・構(コウ)・搆(コウ)・扣(コウ)・走(ソウ)・奏(ソウ)・漱(ソウ(ソ))・蒄(コウ)

◎㋐ウ形＝厚(カウ)

◎㋑ウ形＝偸(チウ)・鍮(チウ)

◎音訳字のみの例＝鴦(ヌ)・兜(ト)・漚(ウ)・喉(ゴ)＝呉音形かどうか尚検討を要するもの。

上に整理したものの中、「㋔ウ」形は、仮名書音形から漢音形にも該当するものであって、当然これ等はその漢音形の混入せるものではないかとの疑いが存する。そして更に、その事を前提に、㋔とあるものは二重母音の後者uが脱落したものにすぎず、従ってこれも漢音に該当するものでは

ないかとの疑いが存しよう（ちなみに、切韻系韻書の侯韻字は日本漢音では、唇音明母音＝ボ、他声母音＝㋐ウ、の様に整然と対応している→次項参照）。この疑いは完全に否定してしまう訳には行かないのであるが、それぞれの声調に注目すれば、これ等「㋐ウ」形を漢音と考える事は出来ない（詳細省略）。

この様に侯韻字に対応する日本呉音の仮名書音形は、㋒・㋐・㋐ウの三形を中心に、㋑ウ・㋒ウの二形を外辺に有する、かなり複雑な様相を有している。日本呉音のこの様な侯韻に於ける不規則性については、勿論従来全く問題にされて来なかったのではない。

例えば、早く満田新造（1964）は、『侯韻の日本呉音は「オ」「ウ」相半して居る後斗表茂母漏（コトホモロ）は「オ」韻、口豆逗頭畝樓（クツムル）は「ウ」韻である』の様に㋐形・㋒形が相半ばして出現する事を指摘し、その㋒形の由来については、朝鮮漢字音について言及された部分で『（四）侯韻の音は尤韻と同じくuで日本呉音に似て漢音と異なって居ることは晋代音の名残と見ることが出来、（下略）』とされている。その他、藤堂明保（1959）、奥村三雄（1956）等にも言及が為されている。但し、いずれも「トウ」「ソウ」形については何も言及が無い。

これらに対して、類聚名義抄「和音」からの帰納によって、㋒・㋐・㋐ウ三形を中心に、その他異例的に㋑ウ、㋒ウの二形が存在したという、より複雑な実態が浮かび上がる。

この日本呉音の侯韻字の実態の解釈においては、上古音から中古音に到るその中間過程の中国側の実態と対比してみる必要が有る。

中国側の、六朝期（魏晋南北朝期）の実態を経典釈文所引の諸家音義によって究明したものに、坂井健一（1975）が有る。この研究によれば、当該期の諸音義に反映した字音は基本的には中古字音の体系（切韻の体系）に一致するものである事が示されたのであるが、我々が特に日本呉音との関連に於いて興味を引くのは、そういう基本的な性格の下に出現する種々の切韻音に対する異例である。当面の侯韻について知り得る特徴点を取り出してみると、大きく二つの特色が見出される。即ち、①侯韻←→尤韻三等の相通、②侯韻←→虞韻の相通、である。

①の具体例の若干（下側が広韻音）

○徐邈音義

驟　在遘反←→鋤祐反　　漱　素遘反←→所祐反　等

○劉昌宗音義

侔　莫豆反←→莫浮反　　趣　祖侯反←→側鳩反　等

②の具体例の若干

○徐邈音義

侮　音茂←→無主反　　務　莫候反←→武遇反　等

○劉昌宗音義

趣　清須反←→倉苟反　　薮　色縷反←→蘇后反　等

これらは、呉音の実態とも重なるものであって、共通の祖系音に基づいている可能性を読み取ることが出来る。

先に示した様に、呉音の仮名書例には他に鍮・偸の㋑ウ形、厚の㋒ウ形が出現する。

この中、㋑ウに就いては、切韻音では㋐ウ形が期待される所に㋑ウ形が出現する。この鍮・偸は現象的には先に見た六朝音義の侯←→虞韻間の相通で以て解釈可能である。即ち、日本呉音の虞韻の仮名書音形は舌音字のみが柱（チウ）・株（チウ）・住（チウ）と割り音で出現する。この「偸（チウ）」「鍮（チウ）」は、侯←→虞韻の相通を背景にその舌音字であったが為に割り音形で出現したと解釈する事が出来よう。承暦本最勝王経音義に有る書入れ音注「漱シフ音」も、それが日本呉音として伝承されて来たものとすれば、同様に侯←→虞韻の相通を背景としたものと見る事が出来る。ちなみに「鍮」は朝鮮字音でも「tyu」と出現しており、出現の背景を同じくするものである可能性が有ろう。

次に「厚（カウ）」についてみるに、この音形も恐らく、呉音の祖系音に由来するものであろう。即ち、再度坂井氏前引書について見るに、六朝音義中に次の様な反切形が見られる。

○郭璞音義

叟 音騷←→蘇后反

○沈重音義

猱 乃溝反←→奴刀反

これ等の例は侯←→豪韻間の相通であり、日本側に引きつけて言えば、㋔ウ←→㋐ウの相通という事である。日本呉音の「厚(カウ)」はこの現象と共通の基盤に立つものであり、六朝期の祖系音に出現していたその開音形を伝承したものとして解釈が出来るものである。

切韻に於いて侯韻として纏められた諸字は上古音では之部・侯部・幽部にそれぞれ分属していた。その上古音から切韻音に移行する六朝期（一方言）音の実態を留めたものが日本呉音であり、日本呉音に出現する侯韻字の㋒・㋔・㋔ウ主要三形はその六朝方音の音声的な実態を留めたものと解釈され得る。孤例的に出現する「偸」「鍮」の「チウ」形、「厚」の「カウ」形も亦そこに出現していた異例の方音形をそのまま取り入れ伝承したものと解釈し得る。そこから日本呉音はその基本的な部分が六朝期方音体系によってなりたっているという見通しが可能である。

b 呉音の声調体系

呉音に於けるもう一つの大きな特徴に、その声調体系の特異性がある。

呉音に声点が加点された最も古いものは、今のところ慈光本大般若経平安後期(1050 年頃)であり、承暦三年(1079)写金光明最勝王経音義、西教寺本法華経等が続く。平安初・中期の資料には声点加点資料は全く存在せず、平安後期になって出現することは、恐らく、漢音の声調の枠組みによって読誦伝承呉音の声調が捉え直されて行った為と思われる。平・上・去・入の調値は呉音も漢音も同じでそれぞれ低平・高平・上昇・入破音である。

代表的な呉音資料の中古音との声調を比較紹介してみると次のようになる。(入声は省略)

(慈光寺本大般若経)

慈光＼広韻	平	上	去	計
平	18	4	20	42
上	3	1	4	8
去	13	3	3	19
計	34	8	27	69

(承暦本最勝王経音義)

最光＼広韻	平	上	去	計
平	67	27	55	149
上	6	4	0	10
去	64	28	38	130
計	137	59	93	289

(図書寮本名義抄和音)

和音＼広韻	平	上	去	計
平	17	6	15	38
上	1	0	0	1
去	6	2	8	16
計	24	8	23	55

(図書寮本名義抄和音)

呉音＼広韻	平	上	去	計
平	36	20	29	85
上	3	3	0	6
去	28	17	27	72
計	67	40	56	163

呉音系字音の声調の特徴として、①上声調が欠落し殆ど出現しないこと、②中古音との対応が無い(概略を言えば半数が平←→上・去の間に於いて反対になる)こと、が指摘できる。①についてもう少し詳しく見ると、読誦字音点では、上声の出現比率が上がるが、単字で整理された音義には上声の字が殆ど出現しない。この上声が欠落していたことは、九条本の和風反切の系連法の処理に依っても平・去・入声の三類型にしか成らないことによって明白である。また、音義の上声例は全て一音節字である。詳細は省略するが、これらの事実を綜合して分かることは、呉音が本来三声体系であったこと、上声の例は読誦音における声調変化として出現したものであること、一音節上声の例は曲調音節である去声が日本語音節の制約に縛られて高平調に移行した和化事象であったこと、

例は曲調音節である去声が日本語音節の制約に縛られて高平調に移行した和化事象であったこと、等が明らかになる(沼本 1976)。

この様な呉音の特徴は、呉音が或る特定の中国語方言音を直接母胎音として成立したものとは考えにくい事を暗示している。

c 呉音系字音の伝来経路

河野六郎(1979)に依れば、朝鮮漢字音の声調体系も、中古音に対して特異な対応をすることが指摘されている。それは丁度日本呉音で上声調の欠落した体系に重なる可能性があるように思われる。とすれば、日本呉音ー言い換えれば仏典読誦音ーは、やはり朝鮮半島を経由したー朝鮮漢字音を母胎にしたー間接的な移植の産物であると見るべきであるように思われるが、その朝鮮漢字音の古代の声調の実態が今ひとつ現状では把握困難であり今後の課題として残される。

Ⅱ漢音系字音資料の分析ー漢音と唐代漢語字音

1 訓点資料の字音

○博士家経書訓点資料ー周易抄(宇多天皇宸筆)、古文尚書平安中期点、毛詩平安朝期点、春秋左氏伝平安中期点、春秋経伝集解保延点、高山寺本論語、等

これらの経書訓点資料には仮名音注は殆ど加点されていないので、日本字音資料としては有効性が低い。但し、大学寮の教科書であり、漢音が使用されていた事はわずかな仮名書きによって確認できる。尚、訓読における漢音学習に陸徳明『経典釈文』が利用されていた事が明らかにされている(新美保秀(1957))。これらの資料群で注目すべきは、いずれも声点が使用されているという点である。平安時代９００年頃の博士家訓点資料に声点が出現する。これらの声点によって、漢語の四声までも正しく伝承され事が可能になった。周易抄は六声体系、古文尚書では五声体系、毛詩では四声体系というように、その体系は区々のように見える(沼本(1982))。

○博士家紀伝系訓点資料ー漢書楊雄伝天暦点、史記延久点、九条本文選、等。

仮名加点の少ない博士家訓点資料の中にあって、漢書天暦点には可成りの仮名書き例があり、この期の漢音の実態資料として重要である。その実態については沼本(1986)で触れている。声調体系は典型的な六声体系である。この漢書の訓読に於いて注目すべきはその仮名書き例の中に「欲(ユ)(広韻＝余蜀切、顔師古＝弋樹反)・遲(セイ)・巍(化イ)・払(ヒツ)」の様な切韻系韻書に登録のない音形が可成り見られることであるが、その原因はこれらの音が本文顔師古割注の音注や『漢書集注』『漢書音義』等の音注が参照されていたからである(沼本(1982))。紀伝道の伝統的な学習形態として成立していたらしく、室町期の上杉本・松本図書館本漢書訓点資料にも同様な方法ー従って字音形ーが伝承されている。

○南都伝記類訓点資料ー興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝・石山寺本大唐西域記・石山寺本高僧伝・石山寺本南海寄帰内法伝、等

これらが漢音読されているのは、奈良朝期前後にかけての南都古宗の入唐僧(道昭、道慈 718 帰朝、普照 733 帰朝、玄昉 735 帰朝)や唐僧(鑑真 753 来朝等)の伝えた中国語が背景にあったことが考えられる。これら南都の訓点の声調体系が日本漢音としては古い姿を止めている(→後述)事と符合する。

以上の諸資料の内、興福寺本慈恩伝を対象として、築島裕(1967-1)に分韻表が公表されている。

○空海撰述書ー文鏡秘府論・性霊集・秘蔵宝鑰、等

恐らく、空海のマスターした中国語が母胎となり、伝承の源流となったものであろう。

以上の諸資料の内、図書寮本文鏡秘府論については柏谷嘉弘(1965)の分韻表が公表されている。

2 直読資料の字音

○孔雀経ー仁和寺蔵重文平安中期点以下、高山寺、東寺、仁和寺等の真言宗寺院に可成り現存して

いる。全て漢音で読誦されている。空海将来経であり、空海が始めた漢音による読誦が源流になったものであろう。仁和寺重文本は平安中期極初頭の加点と見られるが、その声点は極めて特異である。平上去入の各声に更に四カ所の声点がその清・次清・濁・次濁の声母の違いによって区別されているという詳細なもので、その四声・声母は中古音の体系と殆ど正確に対応している。背景は詳細には分からないが、高度な音韻論が行われていた事が伺われる(沼本(1974))。その他、孔雀経の読誦音は中国語原音の姿を留めて平安時代には読誦されていた形跡として、次清声母＝有気音に「:」型の声点が使用されていたり、匣母(h-)に「ㄴ」型の声点が使用されている等が見られる。尚、分韻表としては東京大学国語研究室蔵康平六〈1063〉年点を対象として二つの分韻表が公表されている(原裕(1998)、李京哲(1999))。この孔雀経の声調は典型的な日本漢音の体系である六声(平声と入声に軽重を区別する)体系と見られていたが、最近、原(2005)により、古い声点が抹消されている痕跡の有る事が明らかになった。それを見ると、より詳細な八声体系である可能性も有りそうである。

高山寺本理趣経

大樂金剛不空眞實三摩耶經
般若波羅蜜多理趣品
大興善寺三藏沙門大廣智不空奉　詔譯
如是我聞一時薄伽梵成就殊勝一切如來
金剛加持三摩耶智已得一切如來灌頂寶
冠爲三界主已證一切如來一切智智瑜伽

○蒙求一文化庁蔵長承本以下、十数本が現存している。

正倉院聖語蔵本を対象にした分韻表が有坂秀世(1957)、長承本を対象にした索引が築島裕(1958・1990)、分韻表が沼本(1995)に公表されている。

○理趣経一高山寺本、仁和寺本、その他、可成りの現存本がある。

以上の内、高山寺本については沼本(1983)の紹介が有る。節博士が加点されており、鎌倉中期の漢音の四声の調値が把握できる。それによると、平重は低平調、平軽は下降調、上声は高平調、去声は上昇調、入声は軽重が無くなり軽の方へ統合し高平入破音、であることが良く分かる。

3漢音系字音の特徴

a中古音・秦音との対照

慧琳〈７３７～８２０〉の『一切経音義』の音注から帰納された唐代中期の秦音の研究は、黄淬伯の『慧琳一切経音義反切考』によって、その体系の全貌が一応整理して示され、中古音以後の音韻変化の様子が解明された。その後、より精緻な解釈が試みられ、河野六郎(1979)、平山久男(1967-2)、三根谷徹(1992)、上田正(1987)等に修正や別解釈の提示がなされて来ている。丁度慧琳の時代に移植されたと推定される日本漢音がこの音韻体系と極めて密接な関連を有することは、従来の研究でも屡々言及されて来た。但し、問題は、従前の研究では、日本漢音は唐代長安音を母胎にしたもので、切韻音の体系とは異なるものであるが、その差は小さく、基本的には切韻音と同じものであるとする一般的な認識が成立していると思われる点である。この点は現代漢和辞典等於ける具体相に隠然と反映している。即ち、切韻音を等韻図として処理した『韻鏡』に全面的に依拠して決定された漢音（及び呉音も）仮名遣いは、文雄から本居宣長に受け継がれ、それを踏襲して成り立つ今日通行の大部分の辞典類は、切韻体系による演繹的な漢音形（と呉音形）を放置したままとなっているのが現状である。

さて、そこで改めて上述秦音と日本漢音と対照させてみると極めて良く一致する。

秦音の体系の解釈に就いては必ずしも諸説一致しない。その詳しい議論については前引の諸書・論文に譲ることとし、ここでは河野六郎(1979)によって提示された体系の枠組みを利用する。

日本漢音の具体的な資料として長承本蒙求（築島裕(1990)）を使用する。この資料について中古音と秦音との対照可能な形で分韻表を作り直し(詳細は沼本(1995))、簡略化して示すと以下の様になる。

1、通摂

中古音	秦音	日本漢音（平・上・去）	（入声）
東	冬	㋐ウ	㋐ク

冬			
東乙	東乙	㋑ウ	㋑ク
東乙唇音	東乙唇音	㋒ウ・㋔ウ	㋒ク・㋔ク
鍾乙唇音		㋔ウ	
東甲	東甲	㋑ウ	㋑ク
鍾乙	鍾乙	クヰヨウ	クヰヨク
鍾甲	鍾甲	㋑ヨウ	㋑ヨク

2、江摂

江	江	㋐ウ	㋐ク

3、止摂

支開乙 脂開乙 之開乙 微開乙	脂開乙	㋑
支開甲 脂開甲 之開甲	脂開甲	㋑
支合乙 脂合乙 微合乙	脂合乙	ヒ・クヰ・ヰ
支合甲 脂合甲	脂合甲	ツイ・スイ・クヰ・ヰ

長承本蒙求

4、遇摂

模 侯明母	模	㋔
魚乙	魚乙	㋑ヨ
魚甲	魚甲	㋑ヨ
虞乙 尤唇音	虞乙	㋒
虞甲	虞甲	㋑ウ・(ス・シユ・ユ・ユウ

5、蟹摂

咍 泰開	咍	㋐イ
灰 泰合	灰	㋐イ・クワイ
皆開 夬開 佳開	佳開	㋐イ
	麻開	㋐
皆合 夬合 佳合	佳合	㋐イ・クワイ
	麻合	㋐・クワ
祭開乙 廢開	祭開乙	?
祭開甲 齊開	祭開甲	㋓イ
祭合乙 廢合	祭合乙	エイ
祭合甲 齊合	祭合甲	ケイ・クエイ

6、臻摂

痕	痕	㋔ン	
魂	魂	㋔ン	㋔ツ
臻 真乙 欣	真乙	㋑ン	㋑ツ・㋑チ
真甲	真甲	㋑ン	㋑ツ・㋑チ
諄乙 文	諄乙	㋒ン・クヰン・ヰン	㋒ツ・クヰツ・スヰツ

諄甲	諄甲	クキン・スキン・シキン・スン・シユン・リン	クキツ・スツ・シユツ・チツ・リツ

7、山摂

山開 刪開	刪開	㋐ン	㋐ツ・㋐チ
山合 刪合 元合（唇音字）	刪合	㋐ン・クワン	㋐ツ・クワツ（カチ・カツ）
元開 仙開乙	仙開乙	㋓ン	㋓ツ
元合（唇音字以外 仙合乙	仙合乙	㋓ン・クエン	クエツ
仙開甲 先開	仙開甲	㋓ン	㋓ツ・㋓チ
仙合甲 先合	仙合甲	㋓ン・クエン	㋓ツ・㋓チ（クエツ？）
寒	寒	㋐ン	㋐ツ
桓	桓	㋐ン・キワン	㋐ツ・アチ・クワツ

8、效摂

豪	豪	㋐ウ、唇音字㋔ウ
肴	肴	㋐ウ
宵乙	宵乙	㋓ウ
宵甲 蕭	宵甲	㋓ウ

9、果摂

歌	歌	㋐
戈	戈	㋐・クワ
戈拗	戈拗	不明

10、假摂

麻直開 佳（一部）	麻直開	㋐
麻直合 佳合（一部）	麻直合	クワ・ワ
麻拗開甲	麻拗開甲	㋑ヤ・ヤ

11、宕摂

唐開 陽開乙（唇音字）	唐開	㋐ウ	㋐ク
唐合	唐合	クワウ	クワク
陽開乙	陽開乙	㋑ヤウ・サウ	㋑ヤク・サク
陽合乙	陽合乙	クキヤウ・ワウ	？
陽開甲	陽開甲	㋑ヤウ	㋑ヤク

12、梗摂

庚直開 耕開	庚直開	㋐ウ	㋐ク
庚直合 耕合	庚直合	クワウ・ワウ	クワク
庚拗開乙	庚拗開乙	㋓イ	㋓キ
庚拗合乙	庚拗合乙	クエイ・エイ	？
清開 青開	清開	㋓イ	㋓キ
清合 青合	清合	㋓イ	？

13、流摂

侯 尤（明母字）	侯	㋔ウ
尤乙	尤乙	㋑ウ
尤甲	尤甲	㋑ウ

幽			

14、深摂

侵乙	侵乙	㋑ム	㋑フ
侵甲	侵甲	㋑ム	㋑フ

15、咸摂

覃 談	覃	㋐ム	㋐フ
咸 銜 凡（唇音字）	銜	㋐ム	㋐フ
鹽乙 嚴（凡）	鹽乙	㋓ム	（㋓フ）
鹽甲 添	鹽甲	㋓ム	㋓フ

16、曽摂

登開	登開	㋔ウ	㋔ク
登合	登合	㋔ウ	㋔ク
蒸乙	蒸乙	㋑ヨウ・ヨウ	㋑ヨク・ヨク
蒸甲	蒸甲	㋑ヨウ・ヨウ	㋑ヨク・ヨク

以上のように日本漢音は中古音ではなく秦音の体系と極めて良く一致する。従って、辞典類などにおいて、漢音の音形（仮名遣い）が帰納的に決定できない場合には、この秦音体系に依拠して演繹法が適用されるべきであることが明らかであろう。

その中古音と秦音のずれている部分で、漢音の音形を決定する際に秦音によって修正される必要が有る部分を指摘しておくと次の如くである。

a 東拗乙韻唇音字と鍾乙韻唇音字の合流

日本漢音でも、㋔ウ又は㋒ウとなり、唇音字以外が㋑ウ（東韻）・クキョウ（鍾韻）となるのと異なる仮名書形である。

b 侯韻明母字の模韻への合流

日本漢音でも、侯韻明母字はボと模韻形となる。

c 尤乙韻唇音字の虞乙韻への合流

日本漢音でも、尤乙唇音字はフ・ブと虞韻乙類と同じ形となる。

d 佳開韻の、一部麻韻への合流

日本漢音でも一部麻韻へ合流し、㋐イではなく㋐の形になるものが有る。

e 佳合韻の、一部麻合韻への合流

日本漢音でも麻韻へ合流し、㋐イ・クワイではなく、㋐・クワとなる。但し、日本漢音の場合には全てが移行していたらしい。

f 元合・陽開乙・凡韻の唇音字は軽唇音化して拗介音を脱して直音韻化した。但し反切には反映していない。

日本漢音では、それぞれ㋐ン・㋐ウ・㋐ムとなり当該の直音韻の形と同じである。

g 尤韻明母字の侯韻への合流

日本漢音でもボウとなり、侯韻の音形である。

以上の中、d については、日本漢音でも部分的な現象であったらしく、その仮名遣いの決定は帰納的に一字一字の用例を俟つ必要が有ることになるが、他の場合には、演繹的に決定できることになるであろう。

この日本漢音の実態から知られる重要な点は、その母胎音である秦音の音声的な実態を推定する手掛かりが得られるという点である。

慧琳音義の反切は、旧系の反切（切韻系の反切）と秦音系の反切が重層的に絡み合っているものであって、反切のみによっては、その当時の音韻的実態がどのようなものであったかは明確にし難い。

旧反切の伝承を前提に、それを取り去って残る反切を拠り所に、韻合流の存在を読み取ったものである。従って、旧系反切と新系反切の占める度合いに拘れば、合流していたか否かの解釈にも亦、当然幅が有り得ることになる。この種の問題について、上の日本漢音の実態は明瞭な答えを与えて呉れる。即ち、日本漢音は河野(1979)の秦音体系と極めて良く一致しているのであって、その解釈の正当性を傍証していることになるのである。尚、日本語が中国語と比して単純な音韻体系であるという弱点は持つものの、合流後の音韻体系について、かなり有力な情報を提供して呉れる。

次に、頭子音について以下に問題点を整理して述べる。

(1)軽唇音の独立

秦音では、それまで重唇音系列のみであった所に、新たに、軽唇音系列が生じた。これは音韻の増加であるが、日本漢音には、日本語にこの音韻上の区別が無かったために、この変化は全く反映してはいない。しかし唇音におけるこの軽唇音化は、それと結びついていた拗介音乙類を脱落させるという変化を起こした。この点については有坂秀世(1955)、平山久雄(1967-1)等があるが、日本漢音では、この直音化を極めて明瞭に反映しており、軽唇音声母字で拗介音を保存した形で転写された部分は全く存在しない。

(2)全濁声母の無声音化

秦音では全濁声母が無声音化した。日本漢音でもこれを極めて明瞭に反映して清音で出現している。

(3)鼻音声母の非鼻音化

秦音では鼻音声母が非鼻声音化を遂げた。日本漢音でもこれを反映し、バ・ダ・(ガ)・ザ行で出現する。但し、マ・ナ・ナ行に留まっているものも存するが、それ等は全て鼻音韻尾字(-ŋ・-ŋ́・-n・-m)であって、これ等は逆行同化によって、鼻音化が遅れたものであったと解されている。遅れたというのは、新漢音ではそれ等も亦一旦は非鼻声化をとげた形(次項参照)で出現して来るからである。

以上の中、(1)の拗介音の脱落と、(2)(3)はいずれも音価の変遷に関するものであって、慧琳音義の反切には、(1)は部分的にしか、そして(2)(3)は全く反映してはいない。即ち、日本漢音との対照によって、逆に、秦音の音声的実態が明らかになる部分ということになる。

b漢音の声調体系を手がかりとした漢音の重層性

扨、従来、この様な資料に使用されている漢字音は、現行の漢和辞典類に端的にうかがえる様に、一般常識的には「呉音」「漢音」「唐音」と示される、その「漢音」として一つの均質な体系を持つものの如く考えられて来たが、全てが体系的に均質なただ一つの体系に収まってしまうというものではない。即ち、「漢音」が伝来の時期に応じて更に幾つかの層に分かれていることの手掛かりは天台宗の安然〈８４１～９０５？〉著『悉曇蔵』〈８８０年成〉の次の様な記述である。

我日本国、元伝二音一。**袁**則平声直低、有レ軽有レ重。(略)。

金則声勢低昂、与レ袁不レ殊。(略)。

承和之末、**正法師**来。初習二洛陽一、中聴二大原一、終学二長安一。声勢太奇。四声之中、各有二軽重一。平有二軽重一、軽亦軽重。軽之重者、金怒声也。(略)。

元慶之初、**聰法師**来。久住二長安一委捜二進士一。亦遊二南北一、熟二知風音一。四声皆有二軽重一、著レ力。平入軽重、同二正和上一。上声之軽、似二正和上上声之重一。上声之重、似二正和上之平軽之重一。平軽之重、金怒声也。(以下略)

この記述は、我が国に伝わった漢字音に旧来の「袁」「金」の二家、新来の「正」「聰」の二家の系統が有った事を記録したものである。「袁」「金」については、詳しいことは分かっていない。「正」は天台宗の慈覚大師円仁と共に入唐し、承和１０年〈847〉に帰朝した「惟正法師」、「聰」は天台宗智証大師円珍と共に入唐し、元慶元年〈877〉に帰朝した「智聰」法師である。この四家の伝えた漢字音は声調体系が異なっているという。その詳細については省略するが、この記述は奈良朝以後～平安朝初期に伝わった漢字音に四種類有り、声調体系において顕著な相違があった事を示している。

この様に、伝来の時期によって声調体系が異なるのは、実は中国語における音韻変化を反映した事象であって、漢音の内部が伝来の時期によつて更に細分化されるものであったことを教えてくれている。この安然の記録を発端に、具体的な資料によってこの漢音の複層性を探ってみる。

中国語においては、中古音(六朝末期の北方標準音・「切韻〈６０１年成〉」によって再構される音韻体系)の声調は平・上・去・入の四声体系であったが、唐代に入って起こった全濁字の無声化という大きな音韻変化の肩代わりとして、四声の各々に軽重という音韻論的下位区分が成立した(実際の音調では「軽」はやや高く始まり、「重」はやや低く始まる)。更に「上声」の全濁字は実際の音調が去声に近似していたために、漸次去声調に移行してしまう(上声全濁字の去声化)という音韻変化が進んだ。この変化は唐代初期から徐々に進行し末期に至って完了した。この中国側における上声全濁字の去声化という声調変化が実際の日本側の漢音資料にどのように反映しているかを見ることによって、日本漢音の細分化が可能になる。その手順の細部に言及する余裕がないので結果だけを紹介する。

日本漢音は上声全濁字の去声化率によって大きくＡＢＣの三群に分類できる。

Ａ、本の上声を殆ど保つ資料ー「図書寮本類聚名義抄」等の辞書・音義資料、真言宗孔雀経諸本

Ｂ、本の上声を保つ比率と去声化した比率のおよそ半々の資料ー蒙求古点諸本、大慈恩寺三蔵法師伝古点等の法相宗訓点資料、尚書・春秋経伝集解等の博士家明経系訓点資料

Ｃ、去声化の比率の非常に高い資料ー天台宗の南海寄帰内法伝古点・真言宗の文鏡秘府論古点諸本、漢書・史記・文選等の博士家紀伝系訓点資料

Ａは恐らく辞書・音義という規範を示す目的を持っていたために、「切韻」等中国側の典拠のままに加点されたものであったと考えられる。更に孔雀経に就いては、切韻諸本に基づく「孔雀経音義」が何本か撰述されている事などを手掛かりにすれば、同じくそういうものを典拠として声調が修正されたためであろう。これに対して、ＢとＣはそれらの加点者の使用した漢音の違いが反映されたもので、Ｂが古くＣが新しい伝来になるものであったことが考えられる。既述したように法相宗には奈良時代に入唐経験者が幾人も居たし、大学寮での明経道の成立は古い所から、ＢＣの様な在り方は決しておかしくはない。こうして、漢音の声調体系を手掛かりにすれば、「漢音」という系統の字音も、古いものから新しいものへと幾つかに分かれていると見られることになる。

但し、声調以外の仮名音形の上に於いては顕著ではない。その理由には、一つは中国側における細かな音韻変化が日本語の仮名体系の網の目から漏れた事と、一つは仮名体系の網の目に拾われる程の大きな音韻変化が、漢音の移植された約２００年間には無かった事とが挙げられよう。移植は時間的な広がりを有する所に成立したものであるが、音韻体系はそれ程大きな変動の無い一定の母胎音を共有していた為に、結果的に仮名書音形としてはほぼ均質な体系の中に収まっているように見えるという事であろう。

ｃ伝来経路

舒明２年(630)から始まった遣唐使の交流を大きな手段として、直接中国語が母胎になって成立したのが漢音である。次述の新漢音を別層と見ると、その新漢音の伝来ー円仁帰朝〈８４７年〉ーまでの大略２００年間の中国語が漸次もたらされたわけであるから、其の古い時代のものから最も新しいものまで、伝来の時期によって中国側の音韻変化が反映されているはずで、そう言う意味では漢音自体が複層構造を持つと考えねばならない。

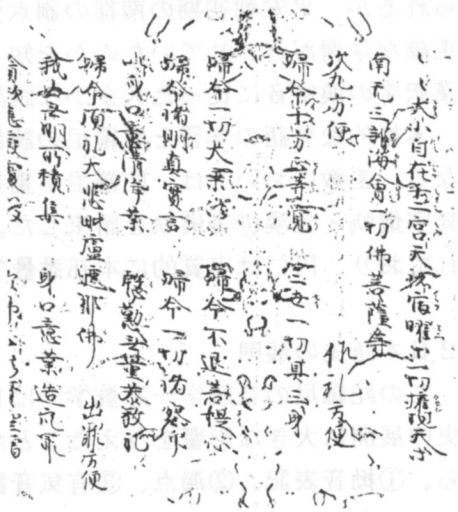
Ⅲ新漢音系字音資料の分析ー新漢音と唐末漢語字音

１新漢音資料の字音

具体的な資料としては、天台声明資料が中心で、法華懺法、例時作法、梵網経心地戒品、天台大師画讃、九方便、五悔、仁王般若経、阿弥陀経、八名普蜜陀羅尼経等である。新漢音資料として最も古いものは、密教儀軌訓点資料である。石山寺蔵薬師念誦次第長元４年(1031)点に収載の「唱礼」、同蔵不動念誦次第長暦元年収載の「九方便」等である。その他、高山寺本胎蔵界自行次第、金剛界念誦

次第等の院政期の密教儀軌にはこの種の字音が加点されている。いずれも天台宗関係のものが初見で、同様の資料が真言宗でも出現するが、多分天台宗の読誦法が後に及んでいったものと考えられる。これらの読誦音は、次述するように、漢音に比較してより新しい中国側の音韻変化を反映しており、唐末の正に円仁・円珍が入唐していた時期の中国標準語を伝えたものと見て矛盾は見られないようである。この漢音よりも新しく唐音よりも古い性格の字音の存在は早く本居宣長が指摘し、橋本進吉、有坂秀世の言及を経て最終的に「新漢音」と命名特立したのは飯田利行(1955)である。

石山寺本不動念誦次第



2 新漢音の特徴

a 中古音との対照ー新しい唐代音韻変化の反映ー

幾つかの特徴を指摘すると次のようである。

①明・微・泥・娘母字がバ・ダ行となる。門(ボン)・孟(バウ)・明(ベイ)・命(ベイ)・寧(デイ)・難(ダン)・念(デン)

②鍾韻牙音三等字が直音となる。恭(ク)・供(ク)

③喉内入声韻尾が弱化している。白(ハイ)・積(セイ)・釈(セ)

④喉内撥音韻尾が弱化している。行(ケイ)・證(シン)・乗(シ)・勝(シ)・称(シ)・応(イ)

⑤職韻字が直音となる。極(キク)・識(シキ)・識(シク)・憶(イク)・臆(イク)

これらの現象は唐代北方音が中世音へ変化していくその早い部分が反映されたものと見てよいであろう。先に述べたように、この種の字音資料そのものが量的には少ないので断定は出来にくいが、その他の基本的な体系は漢音と重なっている。丁度、円仁が入唐していた時期〈838 ～ 847〉の漢語字音の姿が投影されていると見られる。

尚若干の補足を加えておけば、この新漢音自体も単一では無かったようで、先に挙げた諸資料の内で、八名普蜜陀羅尼経の字音は漢音と新漢音との中間的な時期の字音の様相が見られるようである。但しこの八名経の素性(宗派や読誦史)は今のところ不明である。

b 新漢音の声調体系

以上の新漢音資料の声調を見ると、全ての資料について去声化を完了している。この点からも新漢音の母胎音が唐末漢語音であると見られる事を指示しており、新漢音と命名されたこの系統の字音が正にその名称通り漢音の後に位置づけられる新しい体系として区別せられるべきものであることが裏付けられる。

c 伝来経緯ー平安密教との関係ー

この点については、最早述べるべき必要はないであろうが、平安密教の将来に伴い、天台宗の円仁・円珍等の入唐の諸僧、特に現存資料を重視すれば、円仁により唐末漢語字音が将来されたものを起源とするものと見てよいであろう。

Ⅳ梵語音資料の分析

1 平安初期以後の梵語音の学習ー悉曇学ー

梵語を、意訳しないで、漢字音訳した資料を漢語字音の音韻史料として利用しようとしたものに、古くはマスベロ、カールグレンの研究があり、亦、有坂、河野、三根谷の研究が有るが、その研究を主題として進めたものに水谷眞成(1994)の一連の研究があり、多くの興味有る指摘がなされているが、その詳細な成果についてはここでは省略に従う。また、日本悉曇学の展開については馬淵和夫(1965)の研究があるがここでは省略に従う。

さて、本邦に於ける梵語音の学習は、漢訳仏典中の漢訳陀羅尼の読誦ということから始まったと見られるが、平安朝初期の南都の訓点資料には陀羅尼の部分には加点がなされていないから、どれだけ正確な学習が行われていたのかを知ることは出来ない。恐らく陀羅尼の読誦そのものには重点はなく、漢訳字の漢字音に従った大まかな読誦ではなかったかと推定する。

本格的な梵語の学習と陀羅尼の読誦は、前述の密教将来に伴う梵語・梵字資料の請来以後のこととなる。密教においては、陀羅尼が重視された。その読誦のために空海を始めとする入唐僧は悉曇章や梵字儀軌・梵漢併書儀軌を請来した。特に円仁の請来目録にはこの種の教典名が圧倒的に多く収載されており、円仁は実質的に本邦悉曇学の始祖の位置にある。

2日本語史の展開

この陀羅尼の音読学ー悉曇学ーは日本人による漢語字音の学習や日本語音韻の把握、日本語の表記史の展開に大きな影響を与えたことが、悉曇章や密教儀軌訓点資料の分析によって明らかになる。即ち、①拗音表記、②濁点、③有気音記号、④節博士、⑤促音表示、等は漢字音の学問から発生したものではなく、梵語音の学習の場から発生し、漢字音を経由して、最終的に日本語の表記に行き着いたと見るべき様なのである。そのような点について少し触れておくこととする。

①梵字資料の加点

先ず梵字資料の加点本については、早い時期のものとして、「東寺蔵本悉曇章 豊山寺和尚本敷」「東寺蔵本大悉曇章」「東寺蔵本悉曇章 慈覚大師請来全種伝与本」「東寺蔵本悉曇章 智證大師請来」悉曇章諸本、小野僧正仁海自筆の「随心院蔵本不空羂索明」がある。これらを分析してみると、次のような事実が明らかになる。

ア、声点を使用する。(声点の最も古いものは漢音資料でも、呉音資料でもなく、石山寺蔵金剛界儀軌寛平点である)ーこの声点は声調ではなく梵語の長音を去声、梵語の短音を上声で示す為に用いられている(沼本(2003))。これは水谷(1994)が指摘した、中国側の使用法に一致する。

イ、有声音と無声音をする。ー濁音字母を使用する。

ウ、有気音と無気音を区別する。ー複声点「:」で有気音を示す。

エ、子音を区別する。ー例えばraを「アラ」、laを「ラ」で表記し分ける。

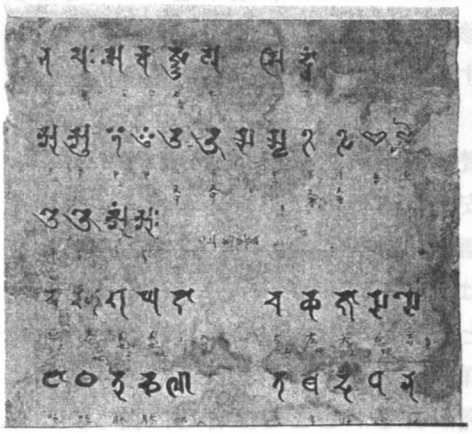
オ、三内鼻音を区別する。ー-n・-m・-ŋを書き分ける。

カ、拗音を「キヤ」「キユ」「キヨ」の形で表記する。ー平安初期の漢字音では漢字同音字注か「キア」形である。

近時の調査で石山寺蔵の石山内供淳祐〈890 ～ 953〉による『悉曇十二章』が管見に入った。これについては別に紹介した(沼本(2004))ので詳細はそこに譲ることにするが、淳祐は色々工夫しながら日本語音韻体系外の梵語原音の区別と書分けを行っている。淳祐の時代〈950 年頃〉迄では、悉曇章を中心とする梵字資料については梵字そのものによる梵語音の学習がかなり忠実に実践されていた姿が浮かび上がってくる。但し、淳祐が音注に用いた使用字母に就いては、全体に恣意的な用字法と言わざるを得ないが、日本語の片仮名(省画)系文字の体系という視点から、その使用字母を日本語の音韻体系の側から整理し直して見ると下の様になる。

ア	イ	ウ	衣	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
誠	義	愚	偈下	御五呉胡
サ	シ	ス	セ	ソ
坐	爾時士	〇	是	曽
タ	チ	ツ	テ	ト
駄陀拏	持尼地	図頭	泥	土奴
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
婆	比尾	歩夫	倍	菩
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
(ワ	ヰ		ヱ	ヲ)

石山寺本淳祐写『悉曇十二章』



ここに概ね清濁が字母に依って書分けられるという平安中期の片仮名体系の姿が浮かび上がって来る。日本語の濁点は、この濁音字母をいかに消去するかという梵字音読の場に於ける学問から発生した。

②漢訳陀羅尼資料の加点

この様な梵語音の忠実な学習の痕跡は漢訳陀羅尼のみの訓点資料文献にも見られる。このことは漢訳陀羅尼の場合も、漢訳のみに頼って音読するのではなく、その背後にある梵語音を復元しながら陀羅尼が音読されていたことを物語る。

石山寺本金剛界儀軌寛平元年点

例えば、「石山寺本金剛界儀軌寛平元年点」では

ア、梵語の有声音を「濁」の省文「ゞ」で示す。

イ、有気音を「ः」点で示す。

ウ、raを「アラ」と「ア」を加えて表記し、laと区別する。

エ、声点を使用する。

等の梵語原音の保持の工夫が行われている。

アは梵語音の有声音と無声音の区別を行った一つの方法であって、平安初中期では一般には万葉仮名による濁音字母で表示された。先の淳祐悉曇章の様な例である。ここで重要な事実は、平安初期中期においては、この有声音ー日本語からは濁音ーの区別は梵語音の部分のみにしか行われていないという点である。漢文本文の訓読部分ー日本語音韻の部分ー漢文偈部分ー漢字音の直読部分ーには見られないのである。梵語音読部に使用された濁音字母は、略体仮名への体系統一という要求の下で、その消去の試行錯誤期を経て濁点が発生することになる。この濁点の発生の基盤が梵語(陀羅尼)の音読にあった事については、かって早く春日政治(1956-2)で指摘され、築島裕(1964)で多数の資料によって追認されていた所である。

イは先に取り上げた悉曇章に見られるもので、やはり梵語に有る有気無気音の区別を行ったものである。

ウもまた、梵語音のみの特徴として存在する r-・l-子音の音韻の区別を行ったものであって、これらに対応する一音素しかなかった日本語、中国語には必要なかったものである。

エは既に述べたように本来梵語の長短を区別するために導入されたもので、起源は中国に有る。この資料では長短とは明瞭には対応していないようであるが、漢字音の四声の区別のために使用されているものではない。本邦に於ける平安初期の声点は梵語音の部分に初出例が出現する。

以上、アイウエから分かるように、いずれも背景に梵語音の区別がある。陀羅尼が日本語音で読誦されてしまっていたならばこれらの区別は必要はない。更に重要な事は、これらの事実は、陀羅尼を漢訳字の漢字音で読誦したものではないという点である。

要するに、清濁の区別、有気無気音の区別は漢字音にも音韻の区別として存在したものではあるが、その区別は漢字音の記述のために行われたものではなく、梵語音の区別のために発生したものであったという事である。

さて、このような梵語音の学習の支えが無くなり、漢訳字のみによって陀羅尼が音読されるに至った時期には、梵音を正しく復元することは極めて困難になる。その最も大きな原因は、日本漢字音に呉音と漢音という二種類の字音が伝承されていた事である。勿論こういうことは漢訳字の陀羅尼ー即ち漢字音ーに依拠して陀羅尼の読誦を行おうとした場合は、平安初期の密教請来当初からそうであったわけで、その議論は、円仁の『在唐記』から既に見えている。安然の『悉曇蔵』の中で、安然が呉音・漢音をあれほど詳細に論じたそもそもの要因は、漢訳字のみによって陀羅尼を正しく読誦するにはその読み分けー体系の相違ーの知識がどうしても必要であったからに他ならないであろう。『悉曇蔵』は全体としては梵字音韻学の総体的な解説書であるが、背景に「漢訳字による正確な梵字音の復

元法」という意図が全体を覆っている。陀羅尼の音読は、円仁・安然の時から既に漢訳字依存への移行を内包していたといえるであろう。

陀羅尼音読が、背景に有った梵語音読から切り離されて、漢訳字に依拠して行った痕跡は、天台宗三井寺慶祚〈955 ～ 1019)にも有る。

『醍醐寺本法華経陀羅尼』は、天台宗の代表的な学僧、円仁、慶祚、皇慶〈977 ～ 1049〉、明覚という四家の法華経陀羅尼の読み方を類集したものであるが、その慶祚の読みとする振り仮名を示してみると次の様である。

安爾(アンシ)一 曼爾(ハン)二 摩禰(ハテイ)三 摩々禰(ハ)四 旨隷(シレイ)五 遮梨第(シャリテイ)六 賒咩(シャヒ)羊鳴音七 賒履(シャヒ)罔嫌反 多瑋(キ)八 羶(セン)蟬千反 帝(モク)九 目帝十 目多履(ヒ)十一 沙履(ヒ)十
a-nye ma-nye ma-nye ma-ma-nye ci-le ca-li-te sa-me sa-mi-ta-vi se-nte mu-kte mu-kta-me sa-me

二 阿瑋沙履十三 桑(サウ)履十四 沙履十五 (以下省略)
a-vi-sa-me sa-mme sa-me

鼻子音字を殆ど全て「ザダバ行」で読んでしまっている。なお声点も又梵語の長短には無関係に漢音一漢語字音史の上からは秦音一声調で音読している。即ち、既に正当な陀羅尼音読からは完全に逸脱して居るものである。慶祚は平安中期を代表する天台宗の碩学の一人であり、彼にして既に梵語音読を放棄していたのである。

この様な例によって、梵語音学習が実質的に消滅した時期は、慶祚以前、即ち平安中期中葉の 950 年頃を最末期とすると見られる事になるであろう。比喩的に言えば、時期的にはこのあたりで、外来語音として梵語音と漢語音が融合し和語の音韻と対立することになったと見られようか。

日本語と中国語との接触は院政末期頃から禅宗関係僧の往来によって、中国中世音の移植が始まり、日本側からは「宋音」「唐音」と命名された日本漢字音の層を形成していく。また、江戸時代にはいると中国近世音の移植も行われている。これらの漢字音資料も又中国音韻史の重要な資料となるものであるが(沼本(1997-3)・肥爪(2005)参照)、本発表では省略させていただくこととした。

以上

参考論文(日本側の字音資料の紹介に重点を置き、影印・索引・分韻表を中心として掲げた。なお、著作集を優先して掲げてある)

有坂秀世(1955)『上代音韻攷』

有坂秀世(1957)「正倉院御蔵旧鈔本蒙求の漢音」(『国語音韻史の研究　増補新版』)

飯田利行(1955)『日本に残存せる中国近世音の研究』

上田正(1987)『慧琳反切総覧』

奥村三雄(1956)「日本漢字音の体系」(『訓点語と訓点資料』第６輯)

小倉肇(1977 ～ 78)「新訳華厳経音義私記の同音字注(上)(下)」(『弘前大学教育学部紀要』)

小倉肇(1978 ～ 79)「金光明最勝王経音義字音考(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)」(『弘前大学教育学部紀要』)

小倉肇(1995)『日本呉音の研究』

柏谷嘉弘(1965)「図書寮本文鏡秘府論字音点」(『訓点語と訓点資料』第３０輯)

柏谷嘉弘(1965)「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(『国語学』第６１集)

柏谷嘉弘(1967 ～ 68)「和名抄の類音字による字音注(上)(下)」(『山口大学文学会誌』第１８・１９号)

春日政治(1956-1)「聖語蔵本央掘魔羅経の字音点」(『古訓点の研究』)

春日政治(1956-2)「高野山にて観たる古点本一二」(『古訓点の研究』)

金　正彬(2003)『日韓漢字・漢文受容に関する国際学術会議』(発表要旨集)

河野六郎(1979)「朝鮮漢字音の研究」(『河野六郎著作集２』)

坂井健一(1975)『魏晋南北朝字音研究』

清水史(1978 ～ 79)「小川本新訳華厳経音義私記音注考(一)(二)」(『野州国文学』)

築島裕(1958 ～ 60)「長承本蒙求字音点(一)(二)(三)」(『訓点語と訓点資料』第 10・11・13 輯)

築島裕(1964)「濁点の起源」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』第三十二輯)
築島裕(1966)「法華経音義について」(『本邦辞書史論叢』)
築島裕(1967-1)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究・研究篇』
築島裕(1967-2)「高山寺蔵胎蔵界自行次第字音点」(『訓点語と訓点資料』第３６輯)
築島裕(1983)『大般若経音義の研究・索引篇』
築島裕(1985)「正倉院聖語蔵大智度論古点及び央掘魔羅経古点について」(『正倉院年報』七号)
築島裕(1990)『長承本蒙求』
藤堂明保(1959)「呉音と漢音」(『日本中国学会報』第１１号)
中田祝夫(1954)「地蔵十輪経元慶七年加点本に見えたる字音資料」(『訓点語と訓点資料』第１輯)
新美保秀(1957)「我国古伝論語諸古写本に書入られた論語釈文の性格と価値」(『日本中国学会報』第 9 号)他
沼本克明(1974)「仁和寺蔵重文孔雀経字音点ー漢音声調資料としての位置づけー」(『訓点語と訓点資料』第 55 輯)
沼本克明(1976)「呉音の声調体系について」(『国語学』第１０７集)
沼本克明(1978)「石山寺一切経蔵本大般若経字抄索引」(『古辞書音義集成』３)
沼本克明(1982)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』
沼本克明(1983)「高山寺本新訳華厳経音義・貞元華厳経音義索引」(『高山寺資料叢書』第１２冊)
沼本克明(1983)「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説併影印」(『鎌倉時代語研究』第６輯)
沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』
沼本克明(1995-1)「観智院本類聚名義抄和音分韻表(呉音)」(『日本漢字音史論輯』)
沼本克明(1995-2)「長承本蒙求分韻表(漢音」(『日本漢字音史論輯』、『日本漢字音の歴史的研究』に修正再掲)
沼本克明(1997-1)『日本漢字音の歴史的研究ー体系と表記をめぐってー』
沼本克明(1997-2)「新漢音分韻表」(『日本漢字音の歴史的研究』)
沼本克明(1997-3)「宋音・唐音・統合分韻表」(『日本漢字音の歴史的研究』)
沼本克明(2003)「梵語の四声点」(『国語と国文学』80巻９号)
沼本克明(2004)『石山寺資料叢書ー聖教篇第三』)
原　裕(1998)「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』字音点分韻表」(『訓点語と訓点資料』第 101 輯)
原　裕(2005)「東京大学国語研究室蔵仏母大孔雀明王経古鈔本に見える抹消された朱声点」(『訓点語と訓点資料』第 114 輯)
東辻保和(1970)「安田八幡宮蔵大般波羅蜜多経の音注(資料)」(『訓点語と訓点資料』第４４輯)
肥爪周二(2005)「第８章漢字音と日本語　c.唐音系字音」(『朝倉日本語学講座２　文字・表記』)
平山久雄(1967-1)「唐代音韻史における軽唇音化の問題」(『北海道大学文学部紀要』15-2)
平山久雄(1967-2)「中古漢語の音韻」(『中国文化叢書　言語』)
松尾拾(1949)「慈光寺蔵大般若経の字音点について」(『国語学』第３集)
馬淵和夫(1965)『日本韻学史の研究ⅠⅡⅢ』
水谷眞成(1994)『中国語史研究中国語学とインド学の接点』
満田新造(1964)「支那音韻の歴史的研究 (『中国音韻史論考』」)
三根谷徹(1992)「唐代の標準音について」(『中古漢語と越南漢字音』)
吉田金彦(1957)「法華経単字仮名字音表」(『訓点語と訓点資料』第８輯)
李京哲(1999)「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』の分韻表」(『鎌倉時代語研究』第 22 輯)

第50回国際東方学者会議
シンポジウムIII
2005年5月20日
於：日本教育会館

漢文の自言語による訓読
Xundu Readings of Classical Chinese Texts by Neighboring Peoples

築島裕
日本の古訓点研究（pp. 1-4）

南豊鉉（pp. 5-19）
韓国の口訣資料とその変遷について

沼本克明（pp. 20-37）
漢語字音資料としての日本訓点資料

小助川貞次（pp. 38-50）
訓釈資料としての漢籍訓点資料

陳力衛（pp. 51-61）
漢文訓読に基づく明治新漢語

財団法人東方学会
The Tōhō Gakkai